

表2 内科, 小児科, 眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ	RSウイルス感染症	咽頭結膜熱	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	百日咳	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	12/31~	74	67	4	25	283	50	1		21			2		
2	1/7~	185	80	6	34	249	41			17			5		
3	1/14~	457	52	8	34	222	21	1		13			5		2
4	1/21~	866	50	3	35	189	28		2	10			4		1
5	1/28~	944	42	7	33	197	16			11			1		
6	2/4~	799	35	6	24	198	34	1		20			3		2
7	2/11~	772	15	4	25	184	27			16	1		13		2
8	2/18~	853	14	7	25	217	35		1	17			13		1
9	2/25~	828	24	7	36	248	24			10			10		1
10	3/4~	797	13	2	26	283	25		1	21			3		
11	3/11~	579	4	3	29	272	10		2	20			9		
12	3/18~	462	6	8	18	252	14			12			3		
13	3/25~	228	1	2	22	200	14		1	11	1		6		
14	4/1~	130	1	8	34	178	22			10			10		
15	4/8~	78	1	9	26	167	22			17			5	1	
16	4/15~	74	2	2	27	166	16			13			2		
17	4/22~	54	1	3	34	207	20			21		2	4		
18	4/29~	27	7	5	30	178	22	2		18	1		2		
19	5/6~	22	3	11	20	180	28	1		14			7		1
20	5/13~	17	2	13	26	197	25	7	1	18	1	3	2		
21	5/20~	4	3	19	26	175	29	1	2	21		5	7		2
22	5/27~	2	2	16	41	160	29			21	1	12	2		
23	6/3~	1	3	17	26	135	25	1		16		28	6		
24	6/10~	1	3	17	24	141	29	4		13		22	6		
25	6/17~		3	8	34	89	20	12		17		42	6		1
26	6/24~		1	5	34	113	17	16		23		87	5		
27	7/1~		1	6	33	96	18	58		18		106	9		
28	7/8~			8	23	109	5	96		21	1	140	1		
29	7/15~		2	10	22	135	11	113		25		102	3		
30	7/22~		1	2	12	106	10	142		21		114	3		
31	7/29~		3	5	17	99	10	132		21	1	96			1
32	8/5~		8	6	11	98	12	101		28		106	2		1
33	8/12~		10	2	11	123	20	118	1	24		65			
34	8/19~		8	3	14	104	16	60		23	1	24	3		
35	8/26~		9	1	12	90	27	71		28		33	2		1
36	9/2~	2	19	2	16	92	11	83		30		16			2
37	9/9~	2	35		8	87	13	94		22		7			1
38	9/16~		30	1	6	96	17	54		27		7	3		2
39	9/23~		44	2	10	84	13	43	1	17		5	3		
40	9/30~	1	40	2	14	72	18	46		18		6	2		
41	10/7~	2	79	1	11	72	19	52		24		4	2		
42	10/14~		71	2	8	73	14	32		16	1	5	1		
43	10/21~	2	84		16	87	8	21	1	16		2	2		
44	10/28~	1	110	1	18	94	26	36	1	19	1	8			
45	11/4~		97	3	16	82	9	36		22		8	2		
46	11/11~		94	4	15	87	18	15	1	20			1		
47	11/18~	2	142	2	9	112	19	27	1	20		1	3		1
48	11/25~	8	124	2	12	207	31	17		18			4		
49	12/2~	14	91	1	15	310	33	24	1	16			1		
50	12/9~	28	129	6	11	349	19	26		13			1		
51	12/16~	39	118	7	20	511	32	24	1	16			1		
52	12/23~	54	77	6	13	365	29	6	1	15			3		
	合計	8,409	1,861	285	1,121	8,820	1,101	1,574	19	959	10	1,056	193	1	22

大きく上回る流行となった。

年齢層別報告数では、1歳以下37.6%、2～3歳37.4%、4～5歳17.0%、6歳以上8.0%であり3歳以下が約8割を占めた。

### (13) 流行性耳下腺炎

本疾患は、過去10年間のうち平成17、18年、平成22、23年と数年おきに2年続けて流行が見られたが、本年度の年間報告数は193件と、流行の見られなかった前年(720件)と比べて大きく減少した。季節的な変動も見られず、年間を通して、週当たりの報告数は0～0.6件/定点で推移し、流行は見られなかった。

年齢層別報告数では、1歳以下4.7%、2～3歳22.8%、4～5歳43.5%、6～7歳16.1%、8～9歳7.8%、10歳以上5.2%であり例年同様に2～7歳の報告数が全体の約80%を占めた。

## 3 眼科定点報告対象疾患の動向

### (1) 急性出血性結膜炎

本疾患は局地的に流行することがあるが、流行のない年は季節性が見られず報告数は低いままで微増微減を繰り返すとされる。

年間報告数は1件、過去5年間でも毎年0～2件で推移し、徳島県内での流行は見られていない。

### (2) 流行性角結膜炎

年間報告数は22件であり、前年(21件)とほぼ変わらず、週あたり報告数も年間を通して0.5件/定点以下の低値で推移した。

年齢層別報告数では、10歳未満18.2%、10歳代4.5%、20歳代22.7%、30歳代31.8%、40歳代9.1%、50歳代9.1%、60歳代以上4.5%と年齢による大きな差は見られなかった。

## 4 基幹定点報告対象疾患の動向

### (1) 週報告対象疾患

細菌性髄膜炎の年間報告数は3件であった。過去10年間においても、最も報告の多かった平成22年(10件)を除くと年数件(0～5件)で推移している。年齢層別報告数では、5～9歳1件、10～14歳1件、15～19歳1件であった。病原体では、肺炎球菌が2件検出されている。

無菌性髄膜炎の年間報告数は9件あり、前年(9件)、前々年(11件)とほぼ同数となった。発生時期は、5月から10月の半年に集中した。年齢層別報告数では、5歳未満2件、5～9歳2件、10歳代2件、0歳代、40歳代、70歳代で各1件ずつ報告された。

マイコプラズマ肺炎の年間報告数は17件であり、前年(55件)、前々年(88件)に比べ大きく減少した。年間を通じて発生がみられたが、週あたり報告数も年間を通して0～0.6

件/定点の低値で推移した。

年齢層別報告数では、5歳未満29.4%、5～9歳58.8%、10～14歳5.9%、20歳代以上5.9%であった。例年同様に1～9歳の報告数が大半(約88%)を占め、幼児及び学童に多い傾向がみられた。

クラミジア肺炎の年間報告数は3件であった。過去5年間では、平成22年に1件報告があったのみであり、3年ぶりの報告となった。年齢層別報告数では、5～9歳1件、70歳代2件であった。

ロタウイルスによる感染性胃腸炎が、平成25年10月14日より基幹定点による届出対象疾患に追加された。1件報告され、年齢は80歳代であった。

### (2) 月報告対象疾患(表3)

表3 基幹定点(月報)報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性 黄色ブドウ球 菌感染症	ペニシリン耐性 肺炎球菌 感染症	薬剤耐性 緑膿菌 感染症	薬剤耐性 アシネバクター 感染症
1月	32	5		
2月	19	1		
3月	16			
4月	36		3	
5月	25	1		
6月	31			
7月	24	2	1	
8月	34	1	1	
9月	19	2		
10月	29	4		
11月	40	6		
12月	21	5		
合計	326	27	5	0
前年	350	11	5	0

薬剤耐性菌感染症の総報告数は358件であり、前年(366件)とほぼ同数であった。過去5年間でも平成22年(473件)以外は350～400件で推移し、大きな変化は見られていない。

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の年間報告数は326件(男性213件、女性113件)あり、前年(350件)と大きな変化はなかった。年齢層別でも前年同様60歳以上からの報告が多く全体の約75%を占め、男女別でも男性の報告数が約65%を占めた。

ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の年間報告数は27件(男性18件、女性9件)あり、前年(11件)から大きく増加したが、年齢別では前年同様に10歳未満(約74%)と70歳以

上（約 22%）の報告が多かった。

薬剤耐性緑膿菌感染症の報告数は 5 件（男性 2 件、女性 3 件）あり、前年（5 件）と同数であった。年齢層は 50 歳代 1 件、70 歳以上 4 件報告された。

薬剤耐性アシネトバクター感染症は、平成 23 年 2 月から新たに追加された疾患であるが、現在まで報告されていない。

#### 5 性感染症定点報告対象疾患の動向（表 4）

性感染症患者の総報告数は毎年 300～350 件で推移していたが、本年は 547 件と大きく増加した。しかし、本年 4 月に性感染症定点病院が一部変更されたことより、この報告数を単純に比較することはできないと考えられる。男女別に見ても男性 298 件、女性 249 件と女性の報告数が増加したものの、依然男性からの報告が多く、疾患別でも前年同様、性器クラミジア感染症（43.7%）、性器ヘルペスウイルス感染症

（41.9%）、尖形コンジローマ（9.1%）、淋菌感染症（5.3%）の順に多かった。

性器クラミジア感染症の年間報告数は 239 件と前年（133 件）より増加し、季節的に大きな変動はみられず、年間を通じて報告された。男女別では男性 174 件（前年 116 件）、女性 65 件（前年 17 件）と男性が全体の約 7 割を占め、男女とも報告数は前年を上回った。年齢別報告数では、10 歳代 7.9%、20 歳代 37.2%、30 歳代 30.1%、40 歳代 18.4%、50 歳代以上 6.3%と、20～40 歳代の報告が全体の 85.7%を占めた。

性器ヘルペスウイルス感染症の年間報告数は 229 件（男性 60 件、女性 169 件）であり、前年（106 件：男性 59 件、女性 47 件）に比べ女性の報告数が大きく増加した。また性感染症全体では男性が女性より多く報告されているが、本疾患は女性が約 7 割を占めるなど、女性の割合が他の疾患に比べ高かった。年齢別では、10 歳代 2.2%、20 歳代 19.2%、30 歳代 28.8%、40 歳代 14.0%、50 歳代 17.9%、60 歳以上 17.9%と 20 歳未満からはほとんど報告されず、20 歳以上においては、30 歳代の報告がやや多かったものの各年齢層から報告されていた。また 60 歳以上の報告数が 17.9%と他の性感染症と比較して多いが、高齢者では潜伏していたウイルスによる再発の可能性も考えられる。

尖形コンジローマの過去 5 年間の年間報告数は 40 から 60 件で推移し、本年も 50 件（男性 36 件、女性 14 件）報告された。本疾患も性器クラミジア同様に男性が約 7 割を占め、20～40 歳代の報告が全体の 84%を占めた。

淋菌感染症の年間報告数は 29 件、前年（19 件）まで過去 5 年間減少傾向を示していたが、本年はやや増加した。男女別では、大半が男性の報告（28 件）であり女性の報告は 1 件だけであった。

年齢層別では 20～40 歳代の報告が最も多く、20～30 歳代が全体の約 90%を占めた。

表 4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア 感染症	性器ヘルペス 感染症	尖形 コンジローマ	淋菌 感染症
1 月	16	7	4	
2 月	13	7	3	1
3 月	12	13	3	2
4 月	19	25	3	1
5 月	20	25	4	4
6 月	18	14	5	6
7 月	23	27	4	3
8 月	28	24	5	2
9 月	19	15	5	1
10 月	26	25	6	1
11 月	20	25	5	4
12 月	25	22	3	4
合計	239	229	50	29
前年	133	106	58	19

#### IV まとめ

平成 25 年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について、その動向を検討した。

全数把握対象疾患では、例年同様「結核」が最も多く全体の約 7 割を占めた。報告数は前年より減少したが、依然、医療関係者で「無症状病原体保有者」の報告が多く、医療・介護施設における院内感染予防対策が重要と考えられた。腸管出血性大腸菌感染症は前年に引き続き少なく、平成 24 年 6 月厚生労働省通知による牛生レバーの提供禁止の効果があったと推察される。また、昨年新たに 4 類感染症に指定された「重症熱性血小板減少症候群」や「日本紅斑熱」、「つつが虫病」などダニや昆虫の刺咬による感染症が、野外作業機会の多い中高年者を中心に毎年報告されている。ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識とともに予防対策の啓発が重要と考えられた。風しんが春先を中心に全国的に流行し、徳島県においても 5 年ぶりに多くの患者報告が見られた。CRS など子供に重い障害を引き起こすことのないよう、抗体を保持する割合の低い、若い年齢層の男性を中心に、ワクチンによる予防啓発を行っていききたい。

定点把握対象疾患では、昨年同様、冬から春先にかけて「インフルエンザ」、「感染性胃腸炎」が流行した。夏風邪の代表

とされ、前年流行の小さかった「ヘルパンギーナ」、「手足口病」は報告数が大きく増加し、流行期間も長かった。また例年秋口から流行が始まる「RS ウイルス感染症」は、流行開始時期も早く報告数も前年より大きく増加した。

眼科定点報告疾患では、急性出血性結膜炎、流行性角結膜炎とも前年と変化なく、流行は見られなかった。

基幹定点報告疾患についても、週報告対象疾患の無菌性髄膜炎は前年とほぼ変わらず、マイコプラズマ肺炎も年間を通じて報告数は低値で推移した。

月報報告対象疾患である薬剤耐性菌感染症については、総報告数に大きな変化は見られず「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた。また、性感染症患者の総報告数が大きく増加したが、性感染症定点病院が一部変更されたことより、単純に比較することはできないと考えられる。男女別では、女性の報告数が増加したものの、依然男性からの報告が多く、報告数の多い20～30歳代の男性を中心に引き続き啓発を行うとともに、10歳代からの若年者に対する予防教育も重要と思われる。

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに、迅速かつ適切な情報提供を行ってきたい。